
『光』羽織る死神

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『光』羽織る死神

【Nコード】

N0527N

【作者名】

ウル

【あらすじ】

経験や過程を持たず、正義染みた『答え』と力だけを背負った少年、

その『答え』に最後まで殉じ、憎い宿命の相手と相打ちになって短い生涯を閉じたはずだった。

しかし、再び目覚めてみると、目の前に神と名乗る少女。私の使徒になり、これから行われる神界大戦を勝ち抜けと言う。

少年を構成する『答え』に導かれる通り、神様の『光』を救う為に戦う中、少年は、自分に欠けていた自分だけの大切なものを得

る。
そして、『答え』は揺れ動く。

戦場の優しい死神

「ここまでなのか……結局、僕は何も出来ないじゃないか」

そう呟く血塗れ少年、着衣は血で黒く染まり、少年の容姿に高い神秘性を持たせていた。

その手には、少年には不釣り合いな異質な双剣を持ち、その姿は美しすぎる『死神』

対峙するのは、大人の兵士およそ、二個中隊、

ここは何も知らなくとも、強く、幸せに生きてる人が住んでいるはずの村だった。

今は、火が放たれ、人が逃げ惑い、死体が転がる　　そう地獄と化していた。

「……………ごめんなさい」

その言葉は、誰に送られたものだろうか？

巻き込んでしまった村の人達？目の前の兵士？裏切ってしまった、過去の約束？

どれも正解、でも、どれを見ても、唯の偽善でしかない、救われる物なんて、いやしない

けれども、自分で今、出来る事はこれと……………あとは『殺し』だけだった。

「ごめんなさい……………くっ！」

言葉と共に、涙もひとすじ……………慌てて拭った。

自分の涙は、少年の嫌いな物の一つだった。泣いてしまい、気持ち
が楽なるのが、たまらなく嫌だった。自分の罪は涙なんかで、拭え
る物じゃないから……………

唇を噛み締め、もう1度「ごめんなさい」と呟き、少年の目は、『
暗殺者』のそれに変わった。

-
緊迫した戦場の空気の糸が途切れる

「形纏う消滅矛盾」

少年が詠唱を唱えると、少年の姿は、突然、霞のように消えた。兵
士達に動揺が走る。

魔術、『探陣』『サーチ』にも引つかからず、気配も全く感じられ
ない。危険を感じた兵士達は、お互いに背中を合わせ、防御用の結
界魔術を発動させようとした。その時！！

ザシュ！！

いつきに、少年が現れ、兵士4人の首が飛んだ。

この術、形纏う消滅矛盾は、少年の異能と呼ばせ、『処分』の

理由の1つでもある。

理由は簡単、『絶対に、あり得ない』からである。

この術は、空間に介入する魔術に似ているが、それは、この世界のルール『消滅』『輪廻』『再誕』を、魔力を通して後押ししているに過ぎない。

しかし、少年の形纏う消滅矛盾は、周りの空間を変質させているのだ。

極狭い範囲ではあるが。変質のした空間は、少年の存在を通さない音も、匂いも、気配も、光も、敵の攻撃も通さない。

自分の攻撃も通さない、空間を出た途端に消えてしまう。だから、攻撃するときには、術を解かなくてはならないのが欠点だ。あと、魔力消費が『超』激しいことである。

普通の人間に、空間の質、なんて見えるわけが無い。見える人もいるが、別の理由で認識することが出来ない。その変質した空間では、少年が法則だ。だから、誰も少年の存在に、きずくことができない。

「くッ！かたまれ！！あの術で、背後を取られるな、防御して、術を解いた隙を狙え！」

隊長らしき人物が、叫ぶ。その指示は、的確そのもの、さすが戦闘のプロである。

しかし・・・、少年は読んでいた。本来の目的を果たすため、もうここにはいない。

時間稼ぎを、したかったのだ。だから、無駄に派手な『殺し』方をし、危機感を煽った。

(・・・・・・・・・・あの隊長さんが、いい人で良かった。)

本来なら、囀を差し出し、外の者は、少年が、姿を現した所を一斉に狙うべきだった。

しかし、それでは囀にした人達を助けられない。味方の魔法一斉射撃に巻き込まれて、お陀仏である。

だから、あの隊長は、部下達に防御をさせ、自分は攻撃態勢に入っ

た。
少年の力量は、見ているはずだから、自分が、飛び込んで、助かる可能性はない事もわかっていたはず、それでも、自分の部下を守る為、死ぬ覚悟で、防御も取らずにいたのだ。

(他の所で会えていれば、友達になれたかもしれないね・・・・・・・・・・)

そう呟き、悲しく自分をあざ笑う。

まだ、そんな未練を持っていたのかと。

そして、少年は駆ける。まだ、救える人が、いるかもしれないから・・・・・・・・・・

そして、まだ、生き残っている人達が集う、建物を見つけた。

「これが、僕の最後の仕事か……、『光』を救うって約束したのに、結局、僕が、出来るのは、自分の自分自身の『贖罪』だけなのか……」

悔しそうに、そう呟く、涙を、耐える心が痛い。

これから、僕がするのは、自分の、自己満足の『贖罪』、この人達を安全な所に転移させる。このままだと、証拠隠滅の為、消されてしまうから

これだけの、大魔導を行使すれば、兵士達に見つかるだろう、魔力も、かなり消費するだろう。

その先に、待っているのは死、でも、それでも、かまわない。

これは、巻き込んでしまった人達へのせめてもの『贖罪』

その代償が、自分の死ぐらいなら、喜んで受け入れよう。

少年が、魔方陣を引く、いくら苦手だからって、もし、間に合わなかったら、きっと、僕は死んでも後悔する。

なら、出来る限り、早く終わらせるしかない。

だから、最短の方法として、少年は腕を切り、血を魔法陣に流す。

「やっぱり、少し痛いな」

無感動にそう呟く

少年の血が、魔方阵に染み渡る。血は、大量の魔力を含んでおり、普通だったら、魔力を充填するだけで、1時間ほどかかる魔方阵がたった30分ほどで完成する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・幸せになってね、それと、ごめんなさい。」

我ながら、身勝手だなと思いながら、魔法陣を、発動させる。

だって、この人達の幸せを、奪ったのはまちがいない僕、なのだから。

「さようなら・・・・・・・・」

戦場の優しい死神（後書き）

初投稿です。出来については物凄く自信ないです。

投稿ボタンを押してから、しばらく羞恥と後悔に苛まれルと思います（笑

客観的な意見（感想）待ってます。

宿命・憎しみの愚王

魔法陣は、無事発動した。あとは、彼ら自身がうまくやっていく、そう、願おう。

「うん……、あと、僕のやることは、あの隊長さんに討たれること、かな？」

4人も、部下を殺したのだ。怒り狂てるに違いない、純粹そうだったから。一目会っただけだが、きつとそうに違いない。なんか、変な確信だね。

ちよつと嬉しそうに、クスリと笑う。

「あんな綺麗な『光』を見たのは、久しぶりだね。なんだか微笑ましいや」

自分が殺されるというのに、緊張感に欠ける少年。その姿は歳相応にもみえた。

「気配……、サーチ探陣 & トレース同調、展開」

探知結界と、結界に同調する初歩低級魔法をかけ、周りを探る

「え！3個大隊って、え……、なんか、すごく数が増えたね。」

何でだろ？と疑問に思いながらも、団体さんの到着を待った。

3個大隊といえば、国家同士の戦闘に用いられるような人数である数にして1500人、明らかに、1人に差し向けるような人数ではない。

しかし、その疑問も、団体さんの親玉をみて、すぐに解けた。

「アヘン・S・ヒロイン……、おまえか」

少年の声が、その人物を見たたん、底冷えするような、冷たい物に変わった

すさまじい殺気も放っている。

「久しぶりであるな、28番」

「……………この罨も、お前が仕掛けたんだよね？王さま」

綺麗な笑顔で質問しているが、少年の殺気を見れば、激怒しているのは、明らかだ。

「ふふ、たった村ひとつで、我の身の安全を守れるなら安いものだろう。村の連中も本望に違いない」

少年の殺気が、数倍に膨れ上がった。この男、本気で言っているからたちが悪い。

アヘン・S・ヘロインは下衆だった。正真正銘の、本来ならば王と呼ばれる器ではない。

思考能力は劣るところか、欠如していた。この少年、一人殺すのに、村を囷に誘い出し、両方殲滅する、という作戦しか、立てられなかったことから、それが伺える。（さらに、最後は、1500人による力押しだし）際立った身体能力も無く。器はどこまでも小さい。

災厄最低の器
ナノ単位に違い無いだろう。！！

そんな男が、今日まで、王でいられたのは、自身の魔導 ディケイ・ブレ 崩壊式洗脳 イン と優秀な、実験体達のおかげである。

こいつのせいで、何万人死んだ？

……風 of 村の仲間、そして、初めて『答え』をくれた。少女の姿が浮かぶ

こいつの欲を満たすために、何人の女が犯された？

……顔も見ることがないはずの、母が思い浮かぶ

こいつが、どれだけ、戦争を引き起こした？

……夢も希望も、無いよと言った。死んだよう

な目の、難民の少年が思い浮かぶ。

．．．．．なんで、なんで、こいつのために．．．．．

「お前が、お前が、お前が．．．．．憎い！！！」

「偉大なる我に、幾度も刃向った事は、大罪に値するが．．．．．
．．．ヒッ！」

少年が放ったのは、投げナイフ、当たる前に、護衛に排除されてしまったが、当たれば必殺の1撃。それを、見ただけでも、この愚王は腰を抜かしてしまった。

「生きていても、現在進行形で、災難を撒き散らす。お前みたいな、『史上最低最悪の愚王』は生かしておけない。責任を持って地獄に連れて行く！」

「~~~~~！お前達、あいつを叩き切れ！」

腰を、抜かした状態でも、自分の悪口に過敏に反応し、顔を真っ赤にしながら、『愚王』は叫ぶ。それに、反応した兵士は『人形』のように、突撃する。

勝てる確率は0%．．．．．それでも、僕はあいつを、連れて行く

もう、殆ど残っていない魔力を振り絞り、術式を紡ぎだす。

「僕と鈴．．．．．お願い、最後の力を貸して！！！」

想いの双剣^{カイントライネ}
放^カ !! 開

三叉の双剣が消え、空間の質が劇的に変わる。

1500対1の戦争が始まる。

1500対1の戦争

「形纏う消滅矛盾 展開・・・・・・・・・・失敗」

やっぱ、魔力が足りないか。っと、少年は苦笑する。

懐から取り出したナイフを構え、臨戦態勢に入る。

「無駄な事を、この数に戦えると思っておるのか。クククク、おろかな奴」

「・・・・・・・・・・」

少年は翔る。味方につけた風を、剣や槌や盾にして、自在に振るう。

飛んでくる魔法や、槍の軌道を、微妙に逸らす、そうすることで、攻撃をよけていた。

しかし、数が半端ない。避けるだけで手一杯だ。さらに・・・・・・・・

（魔力がまずいね、後、1分が限度か・・・・・・・・グッ！）

「ハハハ、やったか！我に逆らった報いだ！！苦しんで死ぬが良い！！！！」

避け損ねた、一筋の最速の光矢^{レイ}が、少年の体を貫く。しかも、呪いを付加していたようで、だんだん、体が蝕まれてゆく。

（光魔法にどうやって・・・・・・・・？そっか、実験体が、相変わらず、外道な事をやっているね・・・・・・・・！）

怒りが沸き、愚王を、切り裂きたくなる。

幸い、完全に、体が動かなくなるまでは、まだ、時間があるようだ。なら、油断している今を、一気に攻める！

「こい、
エア・サークル
風剣陣」

少年の言葉と共に、風でできた、無数の剣が現れる。

「・・・・・・・・・・行け！」

そう、少年が呟くと、剣達は、愚王の元に、一直線に飛んでゆく。

「無駄無駄、そんな物が、我に、届く訳なかるう。お前達！さっさと打ち落とせ！！」

風の剣に、数百の魔法が迎打つ。どんな大魔術でも、この火力差では、目標に届くことは無いだろう。しかし、油断は不測の事態を引きおこすものだ。

少年の目的は、風の剣を直接、愚王に当てる事ではなかったのだ。

「暴焰符！・・・・・・・・・・解！」

ドオオオオオオン！！！！

風剣陣の、魔法を解除し、発生した巨大な『酸素』の塊に、中級魔

陣符を投げつける。ついでに、この符には、マグネシウムを、大量に調合しておいた。

超高密度の、酸素の塊×8＋中級火炎魔法＋大量のマグネシウム＝大爆発！！！と言っ感じである。

しかし、威力自体は大した事はない。真の目的は目くらましだ。

この攻撃で、敵の前衛が、ほとんど機能しなくなり、後衛も大混乱だ。

「なっ、何をしておる！？敵は一人なのだぞ！早く討ち取って、我の前にひざまずかせぬかあ！」

（あ、あいかわらずの無能だね・・・、それに、あの臆病な愚王様が、こんな所に来たのは、自分の趣味の為、なんだ・・・）

つまり、この愚王は、無様に命乞いをする少年を、見たかっただけなのだ！

弱い物をいじめて楽しむ、子供とたいして変わらない。しかも、その力は他人のものだ。

少しは度胸がある！と見直したのに・・・

さらに、この愚王は、自分の意識どおりにしか動かない、洗脳した兵隊に対して、罵声の嵐。どう見ても、阿呆の諸行である。あ、癩癩もおこした。

普通だったら、早く陣形を立て直し、現状の把握に努めるべきだ。

で、今、少年が、何をしているかというところ……

（うーん、これくらい、近いたら、風剣とどくかな？）

不意打ちの為、混乱に乗じて、密かに、愚王様に接近中であつた。

少年の得意技は『暗殺』、人ごみに紛れ込み、自身の存在を消すなんて、朝飯前であつた。

騙す相手が、阿呆一人だし

（さて、ここら辺かな？……………
エア・サークル 風剣陣 展開！）

少年の、魔力を乗せた刀が一振り、現れる。

しかし……………

「王よ！ いましたぞ！」

え……………みつかちやたみたいだね。なんて、タイミン
グが悪い。

（洗脳されてない人がいるとは、迂闊だったね……………）

「よくやった。後で褒美をやるう」

「はは！ありがたき幸せにございます」

（あ、なるほど、この人、愚王にとり入ってるだけか。うん、わかりやすいね。）

そして、また少年の下に、数百の魔法が襲い掛かる。

けれど、少年は焦らない。

少年の目的は、災厄の元であるアイツを消すことである。自分の命など、どうでもよい。

愚王との距離は、後2百mほど、この剣なら、文字通り一瞬で届く！

「……………お願い、行って！」

少年の手から、風の剣が消える。それは、少年が、防御を放棄したのと言う意味である。

ナイフで、魔法が防げるわけがない。

歴史に残る、1500対1の戦争……………それは、相打ちに終わるかと思われた。

しかし……………

キュウウウンー！！

（……………！！
ドレインの魔導結界！実験体が、まずい！！）

しかし、もう遅い。魔力は本当に0、手に武器はナイフしか無く、さらに、迫り来る魔法は、とてつもなく巨大が多い。その結果は……………

ドオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

少年が起こした爆発と、比べ物にならないくらいの規模の、爆発が起きる。半径400mが更地になった。

勿論、周りにいた兵士も、巻き込まれ瀕死だ。ある理由で、死んでいないが……

その数、約500名！……愚王！無能を超えて、害悪だぞ！！

ついでに、愚王とその側近は、さつさと、その場から離れてたり……自分の

危機だけには、敏感だね。

（グウウウウウウ……、痛い！体が動かない……どうしょ）

体はボロボロ、というか、普通は30回ぐらい死んでいる。さらに、さつき受けた呪いが、完全に回ってしまった。

それでも、死なないのは、カインストライネ想いの双剣の能力、心象結界である。

この、心象結界というものは、普通の術者では結界内の人物との意思疎通ぐらいしかできないが（1時的なテレパスだと、思えばいい）

少年の、魔導特性 侵蝕 により、媒介とされた心象結界は、少年

が『真に強く望む』理想を叶える。

少年が望むのは、『光』だが、少年は、未だに、その『光』を想像できない為、とりあえず、『人の存在を消さないこと』 世界は答える。

「アブソリュートエア・サークル
風剣陣・最高密度 魔力回収・陣・構造・複製」
痛みを無視して、今の、自分にできる最高の一撃を繰り出そうとする。

体はもう動かない。なら、物を飛ばすしかない。折角、飛ばすのなら、万に一つでも、愚王を殺せるものがいい。

頭の中では、それでも、無駄だと理解している。この剣をもつてしても、愚王を殺すことはできないだろう。あまりの痛みに、この作業を、放棄したくなる。

しかし

（駄目だ！ここで負けちゃいけないのに！！僕は
. . . 僕は！！！！）

そう、自分に言い聞かせ、必死に作業を続ける。

なぜか、愚王は、攻撃を命令してこない。

. 今しかない！！

そして、作り上げたものは

（ははは、・・・失敗か、洒落にならないよ）

形だけ、圧倒的な魔力不足のせいで、中身がまったく空っぽのハリボテができただけだった。

さらに、そのハリボテも、数秒後には跡形もなく、消えてしまった。
・・・

「クククク！これで満足か？もう、お前にできることはない！！
無様な、折角待ってやったというのに・・・何もできないとは！！

クククククク、命乞いをしろ！そうすれば特別に助けてやらん
こともないぞ

さあ、我を愉しませろ！」

「・・・こ・・・とわ・・・る」

刻々と、時間は過ぎ、少年を削ってゆく。

この空間では、人は不死だが、ただ死なないだけである。

正直、このまま死ねたほうが、少年にとっては、幸せだろう。

「そうか！！なら、したくなるようにするまでだ！アハハハハハハ
ハハハハ！！！！

お前たち！いたぶってやれ！！」

そして、また放たれる魔法や、魔導の大群。少年に抗う術はない。

「みんな……な…….……ごめん…….……な…….……さ
い」

フォン！…….…….……ザシュ

突然、その場に響く音、そして、愚王が頭に三叉の双剣を生やして倒れる。

何が起こったかというと、少年の意思とは関係なく、結界が解除され、形を成した三

叉の双剣が愚王の上に、落ちてきたのである。

少年はそれが、偶然ではない事をすぐ理解して、最後の言葉を紡ぐ

「あり…….……が…….……とう…….…….……」

新たな始まりの予兆

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

気が付いたら、僕は見たことの無い場所にいた。緑に囲まれた。神性の宿る御社に・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・どこだろ、ここ？」

僕は、僕は確かに死んだはず。じゃあ、ここにいる僕は、何だ？というか、この、神域のような雰囲気の間は、何だろ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・天国かな？」

僕の場合、地獄の可能性のほうが高いけどね。と付け足して、ちょっと、笑う。

「あゝ、やつと起きた！私の使徒!!」

「!？」

何も無かった空間から、いきなり声が聞こえる。しかも、何のことかわからない。

「えっと・・・・・・・・、君は何かな？」

「私？私は一応、この世界、ヴォーガル世界の一柱、ルドラストローク・アルシャフェル・バラモン、4代目の水の神です」

・・・・・・・・・・・・・・・・え〜と、

「神様？」

「うん」

つまり、僕は神様相手に、質問してしまったと・・・・・・・・普通
に不敬だね。

（・・・・・・・・ま、いいか、神様でも、邪神だったら斬るし、
神様も気にしてないみたいだし）

元々、^{権力者}偉い人を斬ることが多いし、神（自称、実際はただの悪の信
教団体のボス）も斬ったことがあるし、飾りの位には強かったりす
る少年。

「えっと、とりあえず、色々聞きたい事あるんだけど、いいかな？」

「うん、いいよ」

そう言つて、神様の姿が現れる。透き通るような青色の髪、それに、
金色の目をした少女だ。背中に純白の翼が生えている。

なんで、女の子なのだろ？しかも、テンション高いし、まあ、今は、
どうでもいいか

今は、とにかく質問を

「1つ目は、僕は、死んだはずなんだけど、何でこんなところにい
るのか？」

「2つ目は、神であるあなたが、なぜ、僕 ぐとき に接触したか？」

「3つ目は、さっき、私の使徒って、言っていましたけど、何のことですか？」

と、疑問に感じたことを口に出す。

なぜか、神様が感心したように見てる。

「えっと、どうかしました？」

「いや、よく、こんな状況で頭が回るなあ、って思ってたの。ほかの子は取り乱したのに。さすが、私の使徒 うん、今回こそは、勝てるかも！」

「いや、これは、癖みたいなもので……、理由については思い出したくないものばかり」

我ながら、波乱万丈な人生だったね。

外道研究ゴキブリ
研究機関に、刺客を常に送られてたり……

阿呆
愚王の外道な計画を潰しまわったり……

その報復を返り討ちにしたり……

金で買収された味方に、背後から襲われたり、しかも集団で……

愚王^{阿呆}がしたことなのに、なんか、僕のせいになってて、復讐だ〜！
！って、追い駆け回されたり……………

e t c

「……………よく生きていたね〜、今まで」

神様が、同情の視線を送る。僕も、そう思う……………つて！

「君！僕の思考が読めるの？」

「うん！！私の神域だからね　すごいでしょ〜」

いや、すごいけど！

「あまりやらないほうがいいよ。嫌われちゃうから、やるんだったらばらさないほうがいい、警戒されるし、^{外道研究ゴキブリ}某研究所、に連れて行かれて、モルモットにされちゃうから気をつけてね。あれは、潰しても、いつのまにか沸いてくるから」

「……………はい」（本気で心配されているので、ちょっと照れながら）

うん、素直でよろしい。

・・・・・・・・・・・・・・・・妹を相手してるみたい。妹いないけど

なんか微笑ましいな、自然に、頬緩みます。

あれ・・・・・・・・この子、神様だよね？いいのかな

ま、いつか、楽しいし

「話戻して、質問に答えるね。」

「うん」

「まず、1つ目の疑問は、私が、召還したからなの。びっくりしたよ、呼んだはいけど、早速、死んじゃったもの！あわてて魂を回収して、体に縫い付けたの。体のほうは、ゆっくり水に還元して、ゆっくり再生したから、大丈夫だと思うよ。」

一呼吸おいて

「んと、2つ目と3つ目は、私たちヴォーガル12柱神は、3000年に1度、自分達の力の代行者『使徒』を決めるの！人間のことは、人間が決める。っていう規則に従ってね。で、各神の『使徒』が決まった後、『王神』決める。その為に、この世界の全部を舞台とした・・・・・・・・神界大戦を始める！！この大戦に勝利した神と『使徒』にはね、莫大な権限と伴に、『王神』に即位できる。そして、今回こそは、絶対私が勝つの！！私の願いの為に！！！！」

興奮した様子で、そう、話を終える神様。その目には、強い決意が宿っていた。

とりあえず、話をまとめてみる。

・ 僕は、この神様に命を救われたらしい。

・ なんか、戦争に巻き込まれたみたい。しかも、神様達の・・・

・ この戦争に勝つと、莫大な権限が与えられるらしい。

・ この神様には、その権限で、絶対叶えたい願いがあるらしい

・・・・うん、間違いなく、僕、死にそうな目にあうんだろうな

僕の運命なのかな？諦めよ。うん、『光』を救いたいなんて、大きすぎる夢を、抱いた僕に、元から拒否権なんて存在しないんだ。止まることは許されない。進むしかないから、この体が朽ちる。その時まで・・・もう、1回朽ちたケド！

それより、確認してなくてはいけないことが、ひとつできた。

「君は、命の恩人だし、君のことは助けたい。だけど・・・」

少年は、真剣な目で問う。

「君の願いは、何？この答えが・・・もし、邪悪な願いだったら、僕は、君を斬るよ」

この、戦争の賞品である莫大な権限、神様が欲しがるのだから、きっと、想像を絶する物に違いない。そんなものを、邪心に任せて、使われたら大変だ。『光』が消える。

人の営み、笑い、泣き、怒る、その自分にとって大切な『光』を守るため、害する『光』を消す。それが所詮、一綺麗な人 良い人であつても。

それが、少年の戦い。守りきれないとしても、少年は、それ以外の方法を知らない。だから………戦う。だから、問う。

守りたいから、守りたいものを、消す。矛盾した、不器用な少年の生き方

対して、神様は

「私を？斬る？………『冗談？』」

本当にわかっていない様子で、首を傾げながら、聞き返す。

「『冗談じゃないよ………それが僕………だから』」

辛そうに、少年が答える。

空間の質が変わる。

「勝てると思ってるの？私に………人間が」

「………無理だろうね」

目の前の少女からは、膨大な魔力が感じ取れた。しかも、それが能力の一端でしかないこともわかる。

「協力してもらわないと困るの、従ってもらうわ。」

その言葉と共に、神様の後ろから膨大な量の水が発生する。

「もう1回、殺すからその後、考え直してね」

その水が、少年に襲い掛かる！！

その水を見ながら、少年は思った。

「……この水、砂漠の緑化に使えたらいいかな、こんなにあるんだし

そんなことを考えられる少年は、かなり抜けた性格であつた！！（本人自覚なし）

神vs人間の戦いが始まる。ついさっき、1500対1の戦争があつたのに。

なんというか、少年に容赦ないな。この世界……………

新たな始まりの予兆（後書き）

新しい話を書けない！！

ストックはまだ有るけど大丈夫かな・・・

神 vs 少年（前書き）

注意 この小説の中の神は、人間の延長上の存在として書かれま
す。

絶対的な宗教観などを持っている人は、回れ右する事をお勧めしま
す。

ギリシャ神話とかを見ると、なんだ、している事、人間と大差ない
じゃんと思う訳です。権力争いはあるし、疑心暗鬼になって息子食
べるし、最高神ゼウスなんて色欲魔ですしね。

ということで、僕の想像する神様は、一応、永遠の存在（不老であ
り、不死ではない）であり、強大な力を持ち、良くも悪くも、人類
を導く者と言う感じです。

神 vs 少年

襲い掛かる大量の水、向かい打つのは、その水に比べれば、点にか過ぎない少年。

ぎりぎりの所で避けながら水を避けながら、（正確には、逃げながら）想う。

絶対無理、勝てないと

だって！！さっき試しで投げたナイフ、水に飲み込まれたら、団子虫みたいに小さく潰されちゃったんだよ！！もう、何百もあるんですか、その水！？それが、時速100kmぐらいで迫ってくるのだ！！！！つまり、当たったら跡形も残らず、死ぬ。

「すごいね、あと数cmの所で全部避けるなんて、よし、もつと水、増やすね」

また、神様の後ろから、大量の水が……………

「クッ！！
風鉄槌^{エア・サークル} 最硬度重装展開……………、行使
！！」

バシャ！！

とつさに、全力で発動した 風鉄槌 を水に当てる。しかし、水の軌道をほんの少し変えただけで、消えてしまった。反動で飛ばなきや、絶対、水が当たっていた。

風剣陣 が風を線（剣の形）に集中する魔導であり、 風鉄槌

が風を広範囲の面（槌の形）に集中する魔導である。相手が、広範囲で質量（この場合は水）を操る術なら、線である 風剣陣 は役に立たない、斬り損ねた水に、飲み込まれてしまふ。だから、少年の 風鉄槌 を使った判断は、正しいのだが……

（ここまで全く通じないとなると……、奇襲しかないかな。うん）

そうとなつたら、やることは一つ！

「エア・サークル クラド
風剣陣 五月雨、」

それは逃げること！相手の目から消えて、奇襲をやりやすくする。その為に、風で切り裂いて、隠れられる場所を、増やすことにする。

「展開」

その言葉と共に、無数の剣が現れる。その数、およそ、百本！大きなさはかなり小さいが、

明らかに、高等魔導である。展開する時間も、まだ必要だ。そして、その間にも水は襲いかかる。

「よつと、……てつい！！……危なかった。」

それを、相変わらず、ぎりぎりで避ける。

「凄い凄いすごい、私の使徒、強い！勝てるよ！今回こそは私が勝つ！私の願いが叶う！！」

本当に嬉しそうに、神様は、水を振るう。その目には少し狂気も宿っている。そのあり方に、少年は少し恐怖を抱くのだった。そして、

・・・

「完了、行使!!」

その言葉と共に、百の剣が神様に降り注ぐ!と見せかけて、意図的に外していた。まともに狙っても、超弩級の水に消されてしまうからだ。

確実に地面が削られていく。対する神様は

「あゝ!私の神域に何するの!!戻すの大変なのに、もう怒った!」

ご立腹の様子であつた。また、水が増えたとし、精神年齢が低いのは、僕の気のせいなの?・・・この、世界大丈夫かな・・・本気で心配になってきたと、少年は悩む。

「侵蝕、『形纏う消滅矛盾』・・・
展開!!」

少年の本来の力、その禁忌の力で空間に侵蝕し、変質させる。さらに、水を踏み台にして高く、水自体が、全く侵蝕されないことに驚いたが、一瞬で冷静な判断に戻り、遠くに飛んだ。さらに、着地して地面を駆ける。

(・・・、あんな危険な水、砂漠の緑化にも畑仕事にも使えないじゃないか。残念・・・)

そう考える少年は、やはり、どこかずれている。絶対、頭のネジが抜けている。ダース単位で!!戦闘に関しては、傭兵顔負けの実力

なのに、

「……壊滅的に普通の生活ができない気がするぞ。大丈夫か？いや、大丈夫じゃないだろう。」

それはともかく

「消えた！？え、どこ！？」

少年の異能力に、珍しく動揺する神様、それもその筈、神は人に比べて、比べるのがばかばかしいぐらいハイスペックだ。その人に遅れを取るなんて、ありえないことだった。

それなのに、少年の姿は見えない。高速で移動したのならば、音速だろうが、目でわかる。瞬間移動も、魔力の痕跡を辿れる。カモフラージュ、こんな事をしていたら、水に飲み込まれている。つまり・

「未知の手段ってこと！？凄い……凄いや！」

神の、霊長の始まりから全てを記憶した知識を持つてすら、理解できないイレギュラー、とんでもないジョーカーを引いたみたいである。勝つために、都合がいいことこのうえない。神様はまたも狂喜する。

「あ、でも、今勝たないと、私の使徒にならないよね、よし、雨 降り注げー！！」

神様の言葉と共に、降り注ぐ雨、速さはたいしたことは無いが、圧力が問題である。雨一粒で、1kgと重い。だが、防げないことも無い。数千tの水よりはるかにマシである。隠れて場所になっていた

岩を貫く雨を、迎撃するために呪文を紡ぐ、不可侵領域の盾である存在する矛盾の消滅　は魔力を、『超』大量に喰うので使わない。

「^{エア・サークル}風の導盾、展開」

風の盾が水の粒を分散させながら防ぐ、この魔導は質量が軽い風でも、攻撃を防げるようにする。『流れ』の盾である。受け流しながら防ぐのだ。この方法なら、防御力は少ない反面、音は少なくすむ為、『暗殺者』として身に付けた力だった……………人生どこで、何が役に立つかわからないものである。

（よし、これで見つからない。）

風の導盾　が雨を防ぐのを確認した少年は、緊張の糸を少し解く。ずっと、警戒しているのはさすがに疲れるのだ。

少し休んだ後、やるべきことにとりかかる事にした。

（　風剣陣　大量生産、……………奇襲を仕掛ける準備です！）

着実に、奇襲の準備を進める少年、しかし、見つからないという考えが、甘蜜の様に甘かったと思い知らされることになる。

！？

不意に嫌な予感がして、その場から飛び去る。

次の瞬間、少年がいた場所に、巨大な水柱が……………、比喩表現じゃなく、天を貫く高さの物が四本でもある。柱がなくなつた

後には、大きな穴ができていた。

「お！あれを避けるなんて！？本当に君、ほんとに人間なの？」

水柱後の、穴の上に浮かぶ神様。その姿は、透き通る水のプロテクターを宙に纏い（一枚、1'st也）二対の翼を広げた姿は、とても美しく、神々しいものだったが、その威力を、直接見てしまった身としては、恐怖しか浮かばないのだった。

・・・・・・しかし、そこは、頭のネジが大量に抜けている少年である。一般の常識を、期待してはならないのだ。

この光景を目にして、最初に発した言葉は・・・・・・

「綺麗・・・・・・」

という、戦場にひどく不釣り合いな言葉だった。少年は純粹に感じたことを言葉に出したただけなのだが。純粹というか、天然というか・・・・

「な！？」

不意打ち、そう、相手にとっては、完璧な不意打ちだった。神様の顔が真っ赤に染まる。

今、神様の心中には、主に3つの感情が渦巻いていた。綺麗という、純粹な好意の言葉と、常に畏怖されてきた自分の姿を、褒められた事による『羞恥』と『喜び』。

後は、第二形体も出した自分の力を、馬鹿にされた（完全な誤解で

あるが、事による『怒り』だ。それぞれ、3対3対4の割合でミックスされている。

「ふ……ふふふふ」

突然、不気味に笑い出した神様。ただいま、カオスと化した感情が暴れだしそうになるのを戸惑いながら、抑えているのだが……

「えっと……えっと、……どうしたの？」

心配そうに聞く少年「追い討ち」とどめ!!（自覚なし）、

真っ赤になったあと、笑い始めたのだから、心配にもなるのはわかるが、この場合においては、それは大失敗だった。それぐらい察したほうがいいと思う。

「……ふふふ、覚悟はできてるよね!!」

はい、爆発!!

どうやら、このカオスな感情に折り合いをつけられず、八つ当たりで解消するみたいである。傍迷惑な話だと思う。

巨大な円筒が現れ、その周りに魔方陣が大量に刻まれていく。

「三叉槍・トリアエナ 召還!!」

円筒の中から一艘の槍が現れた。遠目にも、それが『超一級品』であることがわかるような凄まじい槍であった。おそらく、世界で7種しか現存しないといわれる『宝具』クラスであろう。

「形纏う消滅矛盾 ！！」

直感的に、危険だと判断した少年は魔力消費も気にせず、最強の盾を紡ぐ。

そして、その直感が正しかったのだと、すぐに証明されることになった。

「大海絶つ飛翔槍 ！！」

三叉槍が飛ぶ！すさまじい速度で！！普通の槍でも、あの速度で当たってしまったら、体が全部吹き飛ぶ。まして、相手は宝具だ。威力は計り知れない。

それを、少年は避けるために行動する。

ん？・・・・・・・・・・・・・・・・折角、最強の盾を使ったのだから、ここは漢らしく真つ向から受けて立つのが、王道？そんなことは関係ない、そんな理由で、死にたくはないだろう。誰だって。何より、作者はまだ物語を終らせたくない。

そう、例えるなら、あなたは、城壁の後ろで、戦艦大和の大砲の弾を受け止められますか？と言う話だ。無理でしょう。多分、

それに、少年は戦闘中の（一応）『暗殺者』、合理的な手段を選ぶまあ、『暗殺者』にしては、かなり色々なものが抜けているが。

そして、むかつて来る槍。結構距離はあったのだが、0.2秒で到着である。通常の間人なら、瞬きする間に刺されていたであろう。

しかし、もう少年は槍直撃コースから外れていた。いくら速いとい

つても、軌道は直線固定だ。その軌道を槍が放たれる前から、神様の手元で予想した。

その為、実際は、1秒ぐらい余裕があつたのである。その余裕をもつて槍を避けたのだ。

そして、

着弾!!

地面に槍が刺さつたその瞬間、槍の神秘が開放されたのだろう。槍が通つた軌道上にあつたものが、真つ二つに裂かれた。

地面には底の見えない大きな地割れが発生し、空も裂かれ、そこにあつた空気が押し出されて、竜巻が発生していた。・・・・・・とにかく、凄まじい威力。

これが宝具の槍、三叉槍・トリアエナ、それに宿る神秘の力である。

宝具に宿る神秘は、最強の『概念』である。魔力を『奇跡』に変えて、籠められた『概念』を実行する。魔力の量によっては、世界の法則をも捻じ曲げて

この槍、三叉槍・トリアエナに籠められた『概念』は、万物を貫くとその軌跡をもつて絶つであり、実際に当たっていたら、少年の不可侵領域の盾も、ただですまなかつただろう。実際、余波だけで竜種の魔物が十分殺せる威力なのだし

無限の魔力を持つ、神様だからこそその芸当だ。

「ありや〜…………やりすぎたかな、魂まで消えてないよね？」

絶壁のクレバスを見下ろし、冷や汗を流しながら呟く。

王神　を決める世界で一番大切といっても過言ではない戦いに、不参加なんて、神にとっては前代未聞の大恥である。

しかも、自分の使徒を、自分で消し去るという、自業自得としか言いようの無い愚行。ここぞとばかりに馬鹿にされるだろう。……………末代までの恥！！

イヤ、この神様にとって、そんなことはどうでもいい。何より絶望的なのは、願いをかなえる機会を失ったかもしれないという事だ！！

（自分のすべてを差し出しても叶えたい願いだから。それを、私は…………私は絶対、かなえるの！！）

必死に、少年の魂を探す神様。しかし、結果は……………

「え……………嘘だね、まさかほんとに、ほんとに消えちゃったの？私の唯一の、希望なのに……………」

神様の綺麗な顔に、絶望の色が宿る。

次の機会は一万年後、そんなに、待てるはずがない。

「う……………うあ……………あうあああああああああッッ！！」

だから、はちきれんばかりに、泣いた。もう何も残っていないから、

『彼』に会うことが、『彼』を救うことが、全てだった。絶望が心を蝕む。

しかし、少年は生きているのだ！！見つからなかったのは形纏う消滅矛盾のおかげである。

で、少年が、今何をしてるかというところ……

「えつと、泣いているの？・・・・・？
？　？　？何故、何故、何故？」

事態が把握できず、思考がループしている。心配そうな顔して

攻撃する絶好の機会だと思っただが……、

優しさで、少年が滅ばないように祈ろうか！！

そんなこんだのぐだぐだで、少年は10分近く固まっていたそうだ。

神 vs 少年（後書き）

『設定』

風剣陣（エア・サークル）

風の魔力の器

武具と言う概念を与えられた為、不可視と言う属性は失われたが、威力は激増している。

カインの技量も相まって、高速&複数展開を可能にし、それを舞うように振るう。

基本的に戦闘の要

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0527n/>

『光』羽織る死神

2010年10月20日21時18分発行